

棒 櫪 財 政

石橋湛山氏が大蔵大臣をされていた頃のことである。私は、石橋蔵相の下で予算編成の仕事をしてきた。

その頃、私の生れた村（香川県三豊郡和田村）の村長さんは田中次郎という人であった。田中家一統は、私の村でも金持の方であり、次郎氏の家も勿論その一統に属していた。田舎の地主という地主が農地改革を契機として家運が傾いたのが多く、田中家一統もその例外ではないが、村長さんの家だけは、それ以前から稍々傾いていたように思われた。従つて住居や庭は立派であつたが、私の子供の頃から財政的には案ではなかつたようである。その村長さんから或る日のこと、私宛に分厚な封書が届けられた。半ば好奇心も手伝つて開いてみると、こういう意味のことがしたためてあつた。

「自分のうち、父が事業に失敗したので、当時中学に在学していた自分は退学した。大きい土蔵や物置は売り飛ばしてしまつた。使つていた下男や女中は全部解雇した。事業に失敗した父としては、先ずこつするより他お家再建の糸口がなかつたわけである。」

ところが近頃の世相をみてみると、国は惨めな敗戦の憂き目をみたのに、義務教育は六・三制とやらで六年を九年に改める。公僕たる役人の数はふえる。国有財産を思い切つて処分しようという勇断も見られない。これでは再建の目処が立たないではないか。

樫の木は養分が足りないときは、枝や葉を切り落して、いわば樫樫にしないと、その樫の木は枯れるにきまつている。一先ず樫樫にすることが、樫の木の命を救い、やがて年月が経つに従い養分が増すに依じて枝や葉をつけ、やがては鬱蒼たる大木に成長することになるのである。つらつら現在の世相をみて深憂に堪えない。敢て拙文を綴り、貴君を通して大蔵大臣に建議する所以である。」

というのである。私は、その平凡な表現の中にこもる財政の哲理と、憂国の至情に打たれたのである。間もなく蔵相官邸で、石橋さんにその要領をお話したのであるが、石橋さんから、この献策に対するコメントを伺う暇もなかったのである。

しかし私は、今でも田中村長の献策が正しいと信じている。簡潔に財政の哲理を説いて余すところがない。唯その後におけるわが国の中央、地方の財政が、田中村長の指向する方向に外れる許りか、曲つたり逆もどりをしていることに痛憤を禁じ得ない。

それでも私は決してこの問題を投げてはいないつもりだ。この哲理を具現する道は、強い安定した政治力が確立され、その政治力を賢明に行使用ることが絶対の要件になるのであるが、私はこの哲理を私の政治生活の導きの星として、その具現のために私の一生を傾けたいと思っている。

安くつく政府

終戦後芦田内閣が成立し、同郷の先輩矢野庄太郎氏が大蔵大臣に就任された。矢野さんは大蔵省に初登庁の日、全省員を中庭に集めて一場の訓示をなされた。その訓示の中で、矢野さんはこういうことを言われた。「ともすれば諸君は役所の白紙で鼻をかまれる場合がありますね。若しその紙が白い紙で而も役所の紙でなくて、自分の紙であつたとしたならば、果してその紙で鼻をかむかどうか考え直してもらいたい。」なかなか味のある訓示であつたと思うが、聞いていた若い役人衆にどれほどの共感をかち得たかは判らない。

もともと人間は自分の物は大切にするものである。学校の机とか椅子とかは粗末にするが、

自分の机や椅子は大事にする。公園の樹木は平気で切り倒すけれども、自分の家の庭木は大事にするものである。それは確かに悪いことには違いない。然し人間というものは、もともとそのような不都合に出来上っているわけだ。お金についても同様なことが言える。自分の金は大事にするが、公の金は案外粗末にするものである。国のお金とか、公共団体のお金とか、会社のお金とかいうようなものは浪費され勝ちなものである。これも悪い事には違いないが、我々が日常経験する儼然たる事実である。

このことを頭に入れずにおいては、財政というものをまともを考えることはできない。財政ということとは、財政学の教科書に書いてあるように別にむずかしいことではない。浪費され易い公の金をどのように有効に使うかということを考えるのが財政の仕事である。その儘ほっておけばどうしても粗末に使われ勝ちのお金を、どうして有効に活用するか、ということに財政制度のねらいがあるし財政家の苦心もある。又自分の金であれば大事にする。国民からその大切である金を税金の形で吸い上げるのだから、できる丈税金を少くするというところに財政のねらいがあり、政治家の苦勞もあるわけだ。要するに財政の哲理は税金を少くすることと公金を大切に使うことに尽きるといっても過言ではない。

アダム・スミスが、国家の機能をできる丈制限して、市民社会により多くの自由を享受させようとしたことや、近くは、アイゼンハワー大統領が安くつく政府（Cheap government）を作り上げることに腐心していることも、煎じつめればこの財政の哲理を実践に移そうという苦心に他ならないのだ。

ところが満州事変以後今日に到る迄のわが国の財政は、中央といわず地方といわず、膨脹に膨脹を重ねて来たし、税金は益々重くなり、全国津々浦々に怨嗟の声を聞くようになって来た。誠に悲しむべきことである。これからの政治は、この弊風を如何にして是正して安い政府をどうして作り上げるかということがその悲願であらねばならないと私は思つ。

ところが、アダム・スミスの時代と我々の時代とを単純に同質と見てはならない。社会化（Socialization）という過程が、社会政策或は社会主義というような思想に支えられて、社会の各分野に巨大な姿を現わして来たからである。この勢は容易に減退するところではなく、益々盛んになって来ている。その社会化の仕事の相手たる政府の仕事は、益々複雑多岐なものになって来た。従つて、安くつく政府を造るなどというのは、古ぼけた古典的思想であつて、この頃の新しい思想を誇る人々にとつては、沈鐘のつなり程の効目がない考えであるかも知れない。

なるほど近代国家の中で、この問題に心をくだいていない国は一つもないと言つても差支えない。唯私が憂うるのはこの社会化が行き過ぎになつてはいけないということである。社会化の行き過ぎは社会化の敵である（Over-socialization is antisocialization）。例えばイギリスの社会保障制度は誠に至れり尽せりのものであるし、アトリー労働党政府が八年の政権を勝ち得て、嘗々として築き上げたのは大きな社会化の建築物であるが、それが一つの大きな原因となつて全国民の活力が衰え、英国の国運が斜陽の憂目を見ていることも否めないことであるからである。

私に言わしむれば今頃社会化の必要を説くことがもつとも進歩的であるとしている人々に対しては、物事をそう公式的に割り切つたり生硬に取扱つたりしないで、もっとねりにねつてもらいたいということである。何故なれば社会化ということは、それ自体をどこまでも賣くことが尊く且つ意味があるものではなく、それが育つ諸条件を充分わきまえてかからないと大きな過ちを犯すことになるからである。その条件というのは、先ず私的であれ公的であれ、資本といるものが充実していなければ社会化の實りは乏しいものになるということである。形ばかり出来上つても、中味が貧血したものであつてはお話にならない。社会化の行き過ぎが資本を喰いつぶすといふことになると、最早それは社会化の敵となるからである。

第二に、社会化は国民の活力を阻むものであつてはいけない。遊んでいても喰える、病氣になつた責任も回避ができるということになれば、これは確かに天国に違いないが、然しそれ丈に国民の活力と自己責任感が減退することになる。従つて国民の活力を殺さず、而も自己責任の原則を貫徹して、なおどうにもならないというギリギリの限界から社会化というものの作業が始まるわけである。その限界をよく弁えておかないと事を誤ることになる。その限界をどこにしくかということが財政の大きな問題である。又一度その限界を上げたら最後それを縮少するという事が非常にむずかしいのが、社会化にまつわる宿命である。即ち財政上弾力が乏しいことを十分戒心しておかなければならない。従つて、その限界内に於て先に申した安い政府をどう切り盛りするかということが、我々の課題になつて来るわけである。

資本主義も、民主主義も、十分育っていないわが国において、その生硬な地盤の上に、貧血した形ばかり立派な社会化の仕組が出来上つても、それは本当の目的を果すことができない。我々はもつと謙虚になつて、その地盤の育成のためにも、或は又本当の實り豊かな社会化を實行するためにも、現在の段階においては却つて安くつく政府をどうして打立てていくかに精進を惜んではいけないと思つ。

公 用 族

さき頃「社用族」とか、「三等重役」とかいう言葉が流行していたが、これと相前後して「公用族」とか「組合族」という言葉が人口に流布され始めた。もとより何れもよい言葉ではない。特殊の体臭がこもつたいやな言葉である。私は、社用族とか公用族とかいう言葉のもつた体臭が、戦後の日本の病弊を象徴しているように思われて、耐えられぬ氣持がする。尤もこれは独り日本だけの病弊ではなく世界的の通弊であるようである。アメリカにおいても、税金が高いので（法人所得税五二パーセント、超過利得税三〇パーセント）、会社の経費で接待し自分もこれに便乗する「社用族」がばっこしているとのことである。そういう税制では一ドル使つても会社の負担はその六分の一強とかになるにすぎない。社用族等一連の呼称を受ける人々は、自分の力で現在享受している生活を営む力がないのに、会社か役所とか組合とかにぶらさがつて、その分を越えた生活を享受していると目される人種である。自分の力以上の生活を何か自分の属する社会に依存して享受するものである。そこで看過してはならないことは

「自己責任」という觀念の欠如である。人前をはばかり、おどおどした態度で斯様な生活の片割れにありついている間は、まだしも哀れではあるが可愛いと云えないところがないと言えない。ところが、近頃は、白晝公然とこの種の群が、我が物顔に横行しているのには啞然たらざるを得ない。世間も亦「世の中はこんなものだ」ときめこんで別に不思議とも考えず、無感覺になつてしまつているが、これでは大変なことになる。

民主主義といふのは、健全な個人のあるところに育つものである。緊張した自己責任感の漲るところに發展するものである。他にぶらさがつている個人が充満しているところでは、本當に責任をもつて発言権と主体性を確保しているものは会社とか役所とかである。いわば、こういう社会ではコレクティブイズムが歩いてゐるわけである。ところが歴史を読んで見ても真に尊いもの真に価値ある文化を生み出したものは、真に自覚した個であつて集団ではなかつた。個が本當の個に還つた時に、その個を通して集団が生氣を呼びもどし、その社会に筋金がいるのであつて、個が自らの独立と主体性を喪失した時には、その個はもとより集団も亦死を俟つ許りになつてくるわけである。

われわれは日本の民主主義の成長をこい願ひ日本社会の健全な躍進を希望するが、そのため

にはわれわれは、先ずこの社用族や公用族の追放から始めなければならぬ。ところが、そう手つ取り早くこの社用族や公用族の追放ができるわけのものでは決してない。人間である以上、誰もすきこのんで社用族や公用族になり下りたい者はないのである。社会人としてそれ相当の責任と体面が維持できる場合には、そういう人種になりたくないのが人情であらう。そこで私は、会社でも役所でも、第一に給与をできる丈多くするように心懸けなければいけないと思う。そうしておけば社用族、公用族の追放に抜本的な手を打つても、これは大方の納得が得られると思う。給与を増すために公私を問わず各団体は、蛮勇を奮つてその財政の刷新を図るべきだ。給料を出すことを損失だと思つのは野暮な話だ。給料を増すことによつて会社や役所に仕事の澁滞がない許りか、責任感の弛緩を回避できることになるわけである。そして又、その勇断から日本の民主主義は生々と発展する素地が造られるし、日本の財政の刷新を招来することができるものと確信する。

又税金をできるだけ減らさなければならぬ。稼いで稼いで税金にもって行かれるようでは、社用族や公用族はどうしても生れる。減税がこの種の害悪追放の一大要件であることも銘記すべきである。

お金の力

俗に「地獄の沙汰も金次第」と言われる。よく世智辛い世相とお金の力との因果関係を現わし得て妙である。お金があれば何でも買えるという。衣食住に必要なものはおろか、名画も買えるし、深山幽谷の美も觀賞できるし、時には貞操さえも奪うことができる。おそろしいのはお金の力ではある。何でも買えるから貨幣論という学問では、お金のことを一般的購買力というのである。

私はこのお金の力の偉大さをこういう風に考えてみたい。それは異質の物を等質のものに変えてしまう力である。質を量に換算してしまふ魔力である。早い話が、ここにある万年筆と本とは何の関係もない全く異質の存在であるが、万年筆は千円で本は二百五十円であると決めてしまふ。つまり、この万年筆はこの本の四倍であると決めてしまふ。名画と精密機械とはそれぞれ何の関りもないのであるが、一度お金という魔力にかかれば、これは〇〇円これは〇〇円だという風に同じ平面の算術に割り切ってしまう。このことは静かに考えると驚くべきことで

ある。人類にとって偉大な発明である。かくて一切の森羅万象がお金の魔力にかかると、これは幾ら幾らと相場がきめられてしまう。しかも全世界の人々が古今東西を問わず毎日嘗々として、このお金の神様に跪坐しつつ苦斗を重ねてきたし又重ねつつあるのである。史家は現代という時代の特長を経済だとみて、現代を経済時代と呼んでいる。しからば、この経済の根本を支えその運行を確保しているお金は正に現代人の神である。まことに靈驗あらたかな神である。近頃では正真正銘の神様までが、この新しい鬼神に顔づいていて有様である。

ところが、このお金という神様は随分間抜けたところがあるから面白い。森羅万象を一つの数字に焼き直す程の神通力をもつていながら、自分自身の価値を決めることができない代物である。米一石が六千円だと決めてしまえば挺子でも動かない神様であればよいが、暫くするといや今度は七千五百円だと決められる。随分融通は効くが間が抜けているではないか。昔一円で買ったものが今では三百円でござると来る。何のことだかガツカリするではないか。

これでは折角働いて蓄積した大事なお金も当てにならない。今のうちに使っておこうということになりかねない。つまり、インフレーションという嵐には風邪を引き易い體質をもっておられるのがこの神様である。そしてインフレーションを起すか起さないかという手品の一切は、

が弱い人間の手に委ねられているわけである。換言すれば政治がお金の値打をきめる大きい責任を負わされているのだ。このことはよく考えてみれば大変なことである。政治とりわけ財政という仕事は、恐ろしい魔力をもった神の使い手であるわけである。

通貨価値の維持ということは一口に言ってしまうは何でもないが、その通貨の流通する地域の森羅万象の貨幣価値的構造を維持するという大きい仕事であり、政治の中にあつて一番全局的な一番大きい役割でもある。それは、経済の消長を左右するのみならず、道義の根底を揺さぶり、人の運命をもてあそび、喜怒哀楽を自由にする恐ろしい魔術である。

財政家たるものはこの事実をよく認識し、絶えず襟を正し、齋戒以て事に臨まなければならぬ聖職を預っているものである。如何に精進するも尚足りない仕事である。